



月島(中央区)の路地。この一角も今はなくなり、ビルが建ってしまった  
(写真: なぎら健彦)

## M E S S A G E

# 町の魅力

## なぎら健彦

NAGIRA Kenichi

### ■プロフィール:

1952年東京銀座生まれ。70年中津川で行われた全日本フォークジャンボリーに飛び入り参加したことがきっかけでデビュー。72年ファーストアルバム「万年床」を発表。以来音楽だけでなく、映画テレビラジオの出演、雑誌の執筆など活躍。著書に「東京酒場漂流記」「日本フォーク私的大全」小説「歌い屋たち」などがある。最近のCDには「日輪」「下町のこころ」など、写真集「東京のこっちがわ」「町のうしろ姿」も発表。



このところ、「近い内に、〇〇辺りが都市開発で一掃されてしまいますよ」と耳にすることが多くなった。思ってもよらぬ言葉に、あわててカメラを手にその場所におもむく。

町の一角に立って見渡すのだが、ここには都市開発とはまるで無縁の町が、いつもどおりの顔を見せている。この町がなくなってしまうということに、まるで現実感が伴わない。一掃されると教えてくれた人の勘違いだったのか。町は息吹いているし、人々が生活している鼓動が感じられる。町の姿を残そうと構えていたカメラから指を離す。

——しかし本当なのかもしれない。過去、そうやって横を向いている内に、幾多の町が変貌してしまったことか。しばらく経った頃、再び同じ場所に立つてみる。どうしたことだ、多くの商店のシャッターは閉ざされ、町から息吹や鼓動が消えてしまっている。

商店街の一角で裸電球を灯し、まだ商いをしている小さな八百屋のおばあちゃんを見つけた。「この辺り、なくなっちゃうんですか?」「えっ、ええ。来年にはなくなっちゃうんですよ」曲がった腰を伸ばして、おばあちゃんに答える。

「そうになったら、おばあちゃんはどうするの?」

「私は行くところがないので、最後まで商売やって……それで終わりです」

「そうですか」懐かしい香りのする、いい商店街だったのに……あたしはそれ以上、言葉を残すことをしなかった。

東京は魅力のある町だった。すべての町に、それぞれの二オイがあった。その二オイがまた町の魅力でもあった。

昭和三〇年代の東京を描いた映画『ALWAYS 三丁目の夕日』が話題になったが、その映像に懐かしさを覚え、また望郷の念にかられた人も多かったことであろう。確かに懐かしい風景がそこにはあった。しかし、風景だけでは足りない。そこに住む人たちがくすくすに描かれる世界も、同じよ

いよなどに描かれる世界も、同じよくなことが言えるのではなからうか。今の時代に、失なわれたものがそこにはある。人の生活が町を支え、その生活が町を作り上げる。無味乾燥の町とは違った人間らしさの残る町に、人々は憧れを持つのである。連続と続いてきた、呼吸をする町そのものが、魅力のある町なのである。

小さな商店がマーケットになるように、マイナーな変わりように人はなかなか気付かない。だが、町全体が取り壊され始めれば、嫌でもそれが眼に入る。町が一掃されれば「ああ……」と、やつと言葉にするが、それも時間がすぐに忘れさせてしまう。

まだまだ変わりはしないと高をくくっている内に、気がつくとも都会は違ってしまった町になってしまう。しかし変わったしまった町は決して元へは戻らない。それが都会の宿命であるかのように、東京はそうして変わってきてしまった。人々はそれを知っているから、往時を描いた映画などに憧憬の念を抱くのもかもしれない。少しでも魅力ある町を心にとどめておこうと……。

町は消え、やがて巨大な高層住宅や商業施設が出来上がる。もともと、ここにかつての人のつながりはない。どこも代わり映えがしない、コンクリートで遮断されてしまった「街」が存在する。今、自分がどこにいるのかさえも見失っていることに気付く。確かに近代的で利便性のあるエリアなのだ。また今日もどこかの町が消えていく。

おばあちゃんが言っていた。「それで終わりです」と……町がなくなるのではない、それで終わってしまうのだ。